

本

稲賀繁美

# 青磁の断片から—竹山道雄が残した書簡群の一端を垣間見る

平川祐弘編著『手紙を通して読む 竹山道雄の世界』

竹山道雄に「磯」という小文がある（『文学界』一九五二年七月初出）。鎌倉の海岸ほど近くに住んでいた竹山は、日夜刻々と変化する磯の景観に親しんできた。「磯のありさまは日に日にちがう。ときにはまるで鏝をあてたようにきれいに光っていることもあるが、ときにはギリシアの浮彫の衣の襷そっくりな文様がついていることもある。そして掃いたように一物も落ちていないこともあるが、たいていはさまざまのものが打ち上げられている」。渚は日々変貌を遂

げるが、なかには宋代の青磁の破片が混ざりもする。鎌倉幕府は豪奢を戒めて、何万という器を破壊して捨てさせたが、その名残らしい。ほとんど指頭大のものだが、まれに掌ほどの大きさの残骸もみつかると。継ぎ合わせてひとつの器に再現できないものか、と試みても、「割れ目がびったりと合うものはけっしてない」（『竹山道雄セレクション』第IV巻、藤原書店、九四頁）。海の底に沈んだ記憶の堆積から、波浪の気まぐれで浜辺に漂着する断片も、これと同様。散

の去就に身近で接した娘婿にあたる編者は、手際よく話題を整理し、差出人を振り分けて、巧みに章立てを捌いてゆく。前半の第一部では戦前期以来の竹山と欧州との交流を描き、後半の第二部では戦中・戦後の交友を扱う。一九二〇年代、第一次世界大戦後のベルリンでの留学生活を、巧みな戯画も交えて綴った若き日の愉快な書簡から、最晩年の文人連との遣り取り、孫たちを含む家族との交流に至るまでが、銜いなく描き出されている。

## 編集と珍事と

「手紙を通して読む」と銘打つが、それにしては前半は、編者による枠づけ、史料の制御が、いささか巧みにすぎた。たしかに敗戦後の占領下、外貨持ち出し制限下での海外旅行の困難や、それを第一次世界大戦後のドイツのインフレと比較する注記は、

歴史的な文脈理解にきわめて有効だろう。だが最近の『竹山道雄セレクション』や、竹山晩年の『著作集』八巻を知る古参の読者にはどうだろう。それらの編著への寄稿者たちからの再引用が適切なだけに、かえって個々のピースがうまく嵌まり過ぎている、との印象も禁じえない。竹山の孫にあたる足立節子は巻末に長大な論考を寄せるかたわら、父君たる編者の「序論」に注文を付け、中身が過剰で話題が飛躍すると苦言を呈した由。本書からはなお割愛された外国語書簡を含む増補版編集を望むのは、割れた青磁の噛み合わせ断片を集める徒勞、盲亀浮木の類だろうか。評者があらまほしく夢想するのは、エミール・ゾラの書簡集編纂事業に類する企画である。とはいえ、編集の過程では、身内の編者をもたじろがせる椿事が、いくつか出来た。身内ならばこそ、



『手紙を通して読む 竹山道雄の世界』（藤原書店）

りぢりの思い出を継ぎ合わせてひとつに復元するのは、至難の技である。ある人物が生涯に発信し、受信した書簡の総体を復元することも、これに劣らず適わぬ夢だろう。本書は、二十世紀の初頭に生を受け、一九八四年に没したひとりの文学者の手元に残された書簡から選び出された幾つかを軸に、この人物の生涯を辿りなおす。すでに同じ編者によって『竹山道雄と昭和の時代』、『戦後の精神史』が上梓されており、本書はその姉妹編と位置付けられる。著者

とも言えようが、そのひとつが竹山の欧州での異性関係である。家族ぐるみの付き合いもあった仏人女性だが、頻繁な着信が親密な関係を勘繰らせる（※注。編者がその扱いに揺れているところなど、この編著の読みどころのひとつだろうか。それにしても経済使節団に同行しただけの身が、語学の才覚もあって代表格に転じ、相手方秘書と英独仏を交えた書簡の遣り取りを自在に堪能している。背伸びしてできる技ではない。自然体での応接の裏には、人生経験の蓄積がモノを言う。その生誕が書簡を通じて浮かび上がる。こうした力量を帯びた人材の養成に関しては、旧制高校以来の教育制度の功罪も問われよう。

## 「棄教」と「転向」と

ヘルマン・ホイヴェルス神父と竹山との交友については、評者は何も

知らなかった。「東洋は騒ぎの中の静けさ愛する。／そこでひとは喜んで蟬に聞き入る。／香油のように沈黙は心をうるおす。／ささやくように徳はひっそり花を開く」。『甘い構造』で知られる土居健郎によるホイヴェルスの詩の翻訳だが、日本人の心性にも通じたこのドイツ人神父を、竹山は駒場の講師に招いた——戦時下の人生行路に悩む一高生への道標ともなればと念じて。

この逸話を紹介する「キリスト教的西洋と向きあって」と題する長大な章は、むしろ独立論文として公表に値する。本章には竹山の「破壊と信仰の交錯——浦上に旅して」（『週刊読売』一九五七年九月二十九日号）という、いままでの著作集には未収録の論考が全文掲載されている。そこにはキリシタン摘発の道具とされた「踏絵」に関する、竹山の周到な思索が発露していて、看過しえない。

ついでには、現在なおイデオロギー的な思惑に左右されて毀誉褒貶が喧しい。竹山には出征を見送った戦没学生への慰霊の心情が蠕っていた。それは昭和十七年の第五三回一高記念祭察歌を知る者には、否定できまい。清水健二郎作詞の歌詞は「運るもの星とは呼びて 罌粟のこと砂子の如く 人の住む星は転びつ」と、沈鬱なる短調を奏でていた。学徒出陣して帰らぬ同輩をもつ今道友信の竹山宛の私信などは、辛くも生き残った特待生の心の内を伝える証言といえるだろう。

理不尽な運命に抗することもならず死地に赴いた若者への竹山の鎮魂の心情は、しかし見方によれば、侵略戦争への加担を免責する言い逃れとも映る。小説の結構はしよせん問題解決からの逃避だとする論難も知られる。そこには第三世界側による共産主義革命に正義を見る価値観が

ここで竹山は、「転びバテレン」フェレイラが踏絵を発明したのは、むしろキリシタンを救うためではなかったか、との意想外な論旨を展開する。もとより教理のうえでは救世主の似像を踏むことなど、冒瀆には当たらない。密かなる信仰の維持には踏絵はかえって好適な隠れ蓑となる。そのフェレイラは『破デウス』という論難書を著すが、そこでフェレイラ改め沢野忠庵は、自らの信仰放棄を、あるうことか「でいうす」に對して誓っている（なお転向誓文の引用に「あんじよ「悪魔」とあるのは「天使」の誤りか……一三二頁）。

竹山はこの「棄教」の倒錯を目聡く捉え、一神教と出会った異文化における妥協形成の表裏の綾を読み解いてゆく。第二ヴァチカン公会議までは禁忌に等しかったこの話題は、長與善郎の『青銅の基督』（一九二三年）から遠藤周作の『沈黙』（一九六

裏打ちされていた。敵対する帝国主義者同士の和解の夢になど、生理的な嫌悪しか催しえない——。竹内好に代表されるこのような竹山への反感は、その未裔たる脱植民地主義者による批判共ども、さらなる考察に値しよう。

戦役から奇跡的に帰還を果たした大野俊一との書簡。夫をフィリピンで失い、子の将来を案じて竹山に手紙を認める、秦郁彦の母——。ここには戦争体験の貴重な証言が再現される。家族や知人との手紙を除けば、本書でもっとも多くの手紙が拾われたのは、芳賀徹の事例だろう。すでに『竹山道雄セレクション』第Ⅲ巻の解説ほかに言及したことがあるため、贅言は慎むが、端的にいつて芳賀徹や編者・平川祐弘の比較文化史構想が竹山の着想の決定的影響下に花開いた事実には、あらためて深く得心したことを、末尾として付記しておきたい。

六年）へと受け継がれ、竹山自身の『みじかい命』（一九七二〜七四年）に至る。そこで竹山は「日本側の警視総監」とも称すべき井上筑後守政重に注目し、「殉教」志願者の続出を食い止めるその手腕にも理解を示す。竹山はゾルゲ事件で被告の通訳を務めるよう依頼を受けた。戦時下の一高で教務主任を務め、思想転向の問題に直面した彼の経験も、本件に投影されているのではと、編者は推測を巡らしている。

#### 死者への鎮魂と戦争への“加担”と

竹山道雄といえは、現在でも『ピルマの堅琴』の作者として、その名を想起されることが多い。占領下の日本でその原稿が検閲を辛うじて免れ、出版に漕ぎ着けた経緯発掘は、北米でプランゲ文庫を調査した江藤淳の書簡に詳しい。二度にわたり映画化され、国際賞も得たこの作品に

（※注）「ソリニヤック夫人」からの独文の書簡が一通翻刻されているが（八七頁）、その判読不明箇所を、いらぬお節介ながら、聊か解説したい。ブラークからドレスデンへの旅程で彼女が推薦したのは Dolonite だろう。外国語ゆえか綴りには間違いが残るが、ドレスデンについては so bombardiertつまりひどく爆撃されて、のつもりが、筆が滑って「が脱落したもの。またブラークは「カサノヴァの住処」が Wohnort と二語に分かれている様子、そこ（Waldes）には Mazarin-Ministerium があって（siehe）、という文脈だろう。達筆の見事な水茎であり、往年の欧州の知的な女性の歴史地理的知識の奥行も堪能できる。

なお同じ夫人の鎌倉の留守家族あての英文の手紙（七五頁）で which とあるところは、編者のいうような whom ではなく、本来 who とあるべきところ。「消息」を which で受けるべきところが、次の関係節で「竹山は山中で凍死？」と冗談を挟もうとして、主語を取り違えたものらしい。